



Title	発話時の「気づき明確化支援」が発話に与える影響：中級日本語学習者での実践を例に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	佐藤，淳子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第15807号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92051
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Sato_Junko_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：佐藤 淳子

学位論文題名

発話時の「気づき明確化支援」が発話に与える影響

—中級日本語学習者での実践を例に—

本研究は、教室内日本語教育を研究対象として、第二言語学習者が言いたいのに目標言語で言えないことがある「気づき」を抽出・分類し、その考察に基づいて気づきを明確化する教育介入を実施することにより、発話パフォーマンスに影響があるか検証することを目的としている。我々が第二言語でやりとりを行うとき、言いたいことはあるのにそれを表現するための言語形式をスムーズに発することができないということが日常的に起こる。従来の研究では、発話時のつまづきは自分の知識の穴に気づいた状態であり、その気づきがその後、当該項目への選択的注意につながることから、習得に寄与すると考えられてきた。この仮説は学習者自身が、気づいたことを把握し記憶に留めていなければ成立しないが、これまでの研究では、学習者が発話時の気づきをどのように記憶しているのかという観点が欠けていた。

著者は、本研究における気づきを、「話者の伝えたい意味生成を含む発話の際に起こる、知識の穴やギャップに関する焦点的注意」と定義づけている。本研究では、気づきに関わる第二言語習得研究について、以下の2つの問題を指摘する。まず、従来の研究では、目標言語のインプットに対する気づきに焦点が当てられており、発話時、すなわちアウトプット時の気づきに関する研究が進んでいない。二つ目に、近年、第二言語習得研究の分野では、学習者を「正しいインプットからアウトプットに至る線形のコンピュータ」としてではなく「主体性と複雑性をもった社会的存在」とであると捉える視座が持ち込まれているが、気づきに関する先行研究では教師や教材が用意した正しいインプットがどのように処理されるかという点に研究の重きが置かれており、話者が言いたいことを言う際の気づきと習得の関係については、未だに明らかになっていないことが多い。

著者は、具体的な調査に先立ち、以下の2点について理論的考察を行っている。まず、従来のスピーチ・プロダクション・モデルを援用しながら、本研究で扱う気づきがプロダクション・モデルのどの部分で起こっているのかを検討し整理した。従来のモデルは、主に英語などの語順にまつわる統語情報が重要である言語を念頭に作られている点や、主に音節言語を念頭においているためモーラ言語である日本語の発話プロセスには対応できない点、記憶研究の知見を参考にしているものの記憶の分類や用語の使用に混乱が見られる点などの問題があった。本稿ではそれらの問題点を検討し、日本語の特質と記憶研究の知見の再整理をしたスピーチ・プロダクション・モデルを示した。

次に、最終的に学習者個々の中で起こる発話中の気づきを、学習項目としていくような教育的介入を志向していることから、気づきとその記憶保持についても検討した。第二言語習得研究に時間軸から見た記憶研究の知見を援用する際は、従来、「長期記憶」「短期記憶」「作業記憶」という心理学の枠組みが用いられてきた。これは、インプットをどのように作動記憶で処理するかということや、インプットをどのように長期記憶に転送するかということが主たる関心事であったためであると思われる。しかし本研究では

発話中に気づかれたことが、時間的及び認知負荷的な干渉を経た（発話を続けた）後に、どのように記憶されているのかを問題にしていることから、臨床心理学で用いられる「即時記憶」「近時記憶」「遠隔記憶」という分類を用い、発話中に発話と同時進行で気づいていること（即時記憶の範疇）と、その発話が終わったあとにその気づきをどれくらい覚えているのか（近時記憶の範疇）に着目しデータ収集と分析を行うこととした。

以上の考察を踏まえ、本研究の目的を達成するため、著者は以下の2つの下位研究を実施した。

研究1では、発話時の気づきが起こりやすい項目について考察している。再生刺激法を用いたデータ収集及び質的内容分析の手法を援用したデータ分析を行い、「語彙に関する気づきが半数以上を占め、全てのケースで起こっていた」にも関わらず「近時記憶として具体的に想起される気づきは非常に限られている」という結果を得た。この結果および実践への取り入れやすさを考慮し、続く実践的研究において、明確化及び記憶への促しを試みる気づきを「語彙、形態、統語、音韻、表記に関する『文法的知識』に関する気づき」とした。

研究2では、教育的介入によって明確化された気づき、すなわち「促しによる気づき（encouraged noticing）」の有無が発話パフォーマンスに影響を与えるかどうかを見る実践的研究を行った。本実践は、意味伝達の途中で言語形式に目を向けさせるという点では、フォーカス・オン・フォーム（FonF）の形態の一つであるが、教師や教材が用意したインプットに対してではなく「話者の伝えたい意味生成を含む発話時の気づき」を問題としている点と、その気づきに対して教師がどう対処すべきかではなく、学習者自身がその気づきを記憶に留めておくことを支援するものである点から、「学習者主導型 FonF」と位置づけた。この研究で著者は、具体的には「発話直後にうまく言えなかった『語彙』を調べる時間を与える、その時間を与えられることを発話の前に知らせる」という介入を行い、介入の有無が発話パフォーマンスに与える影響について、流暢さと語彙的複雑さの2つの指標から検討した。その結果、「促しによる気づき」を教育的介入によって支援することは、いったんは発話の流暢さを犠牲にすることになり得るが、最初の発話から2日経った時点での遅延時の流暢さ及び語彙的複雑さ（語彙の多様さ）には正の影響を与え得ることが示唆された。

本論文は、7つの章と参考文献、および付録で構成されている。第1章では、研究背景と目的が説明され、第二言語習得を認知プロセスとして見ながらも、そのプロセスは個人内で完結するものではなく、第二言語話者および習得プロセスを複雑系システムと捉え、第二言語話者の社会性を認める著者の立場が述べられている。第2章では、気づきに関わる先行研究がまとめられており、従来の研究で十分な議論が行われてこなかった、第二言語話者が言いたいことを目標言語で言おうとするなかでの気づきに注目したことが説明されている。第3章と第4章は理論的考察で、スピーチ・プロダクション・モデルおよび近似記憶に関するこれまでの研究が概観され、本研究におけるこれらの重要概念についての著者の理解と立場が説明されている。第5章は研究1の報告であり、発話時の気づきが起こりやすい項目を考察している。第6章は研究2の報告であり、気づき明確化支援がもたらす発話パフォーマンスに対する影響を考察している。第7章は本研究の総合考察で、研究全体の要約を行い、教育実践への示唆、および本研究の限界と今後の研究の展望について述べている。

本研究の学術的意義は、認知プロセスとしての第二言語習得における意識的学習の重要性を、発話時の気づきを解明することで確認すること、自律学習的な第二言語習得における第二言語話者の社会性を認めることで発話時の気づきの解明に方法論的手がかりを提供すること、その知見から準実験的に教育介入の効果を考察することで教育実践改善に貢献することの3点であると、著者は主張している。